

居住と環境に対する意識構造：大槌住民を事例として

Dwelling and the Structure of Consciousness toward Environment: A Case Study of Otsuchi

○杉野 弘明*・八木 信行**・林 直樹**

Hiroaki SUGINO, Nobuyuki YAGI, Naoki HAYASHI

1. はじめに

近年、都市部から既存集落への移住や、無居住化集落の再居住化等、移住への注目が集まっており、例えば定住者または移住者の特性や意識を調査した論文(例えば(佐藤ら, 2014)⁽¹⁾等)が見受けられる。しかし人間の行為・体験によって出会われていく環境の広がりや展開を人間環境系⁽²⁾として捉えると、住む場所を移すことは人間環境系の変化になる。そのため、移住ないし居住を巡る議論においては、人間の行動だけではなく、その背景となる環境についても議論を行う必要がある。また、時に自然に対する意識構造の違いから新住民と周辺の旧住民との間で摩擦が生じることも危惧されていることから、人がどのように環境と折り合いをつけ、また新しく関係を築くのか、という問いからの視点を持った実証的研究が必要である。

そこで、本研究では不可避的な人間環境系の急激な変化である⁽³⁾自然災害の中でも東日本大震災の後、被災した岩手県上閉伊郡の漁村である大槌町において、そこに住まう人々が環境である海に対してどのような意識を持っているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

2015年11月22日から23日にかけて、大槌住民を対象に、町民の日常生活の購買活動の拠点となっている町で唯一のショッピングセンターである「シーサイドタウンマスト」においてアンケート調査を実施し、合計101名(大槌町人口の約0.8%)から回答を得た(表1)。

質問紙は須賀と大井(1997)⁽⁴⁾を参考にし、回答者にある言葉(刺激語)を提示し、それから連想することを自由に記述してもらう「自由記述式調査」を採用した。本手法は、回答者が調査者側の問題意識に囚われないで回答できるという特徴がある⁽⁴⁾。本研究では調査対象地の人々の生活を支える一方で震災の際に津波として脅威ともなった自然の要素である「海」を刺激語とした。

本調査で得られたデータはテキストデータであるため、客観性の保持、恣意性の排除、手作業による分類の非効率性といった課題がある⁽⁴⁾。しかし、近年ではその解決策として定量的なテキストマイニングの手法が心理学等の分野において発展しており(例えば木村(2005)⁽⁵⁾等)、本研究においてもこの手法を活用した。まず文章を形態素(意味を持つ最小単位)に分割した後に、名詞、動詞、形容詞を対象に頻出語(頻度3以上)を抽出した。その後、抽出された頻出語データを利用し、回答者及び頻出語それぞれのクラスター分析による類型化を行列にした二元クラスター注1)を作成し、それぞれの回答者・頻出の関係性を見ることで、大槌住民が抱く海に対する意識構造及び意識構造から翻った回答者の分類とその特徴を得た。

表1 質問紙回答者の基本属性

Table 1 Demographic Information of Respondents

項目	回答割合(有効回答者数 89 名内)
性別	男性：56% / 女性：44%
年齢	20代：6% / 30代：5% / 40代：7% / 50代：23% / 60代：33% / 70代以上：21%
居住年数	3年未満：9% / 3～5年：1% / 5～10年：4% / 10年～20年：7% / 20～30年：9% / 30年以上：70%

* 東京大学海洋アライアンス Ocean Alliance, The University of Tokyo

** 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduated School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

キーワード：居住、イメージ、自由連想記述

3. 研究の結果と考察

「海」を刺激語として得られたテキストにおける各回答者及び頻出語のクラスターを掛け合わせた二元クラスター(図 1:横軸が回答者のクラスター, 縦軸が頻出単語のクラスターを示す)から, 回答者の意識構造を概念図化したものとして図 2 を得た。結果として, 同じ大槌住民でも「魚」や「津波」といった良くも悪くも「海からやってくるもの」に対する意識が表出しているグループがあることが分かった。さらに, 当該グループ中には「場所」や「家」といった居住に強く結びつく意識群を形成しているグループが存在していることが示された。

以上の結果は, 大槌におけるケースという限定は付くものの, 居住することに関する意識群が上記の“海からやってくるもの”への意識を前提として表出している可能性を示している。すなわち, 移住・定住の諸問題を扱うにあたり, 居住地の背景となる自然環境(本事例では海を採用したが, 他地域ではそれに限らない)への意識, 特に自然から人間へ与えられるものに対する意識の把握と, その構築を促進することの重要性が示唆された。

4. 考察と今後の課題

本稿では自由連想記述により得られたテキストデータを分析し, 二元クラスターにより海と居住を結びつける特徴的な住民の類型化とその前提的な意識構造を示した。

今後の研究では, 以上で得られた結果がさらに他の沿岸漁村や山村でも成り立つのかを探ることが課題となる。また, 移住する側と移住を受け入れる側もしくは周辺住民の自然に対する意識構造の違いを明らかにすることで, その違いにより発生しうる摩擦に対する合意形成に繋がる知見を得られると考えられる。

謝辞

本研究は, 東京大学海洋アライアンスが日本財団の助成により進めている「総合海洋基盤プログラム」の「海洋の利用に関する合意形成手法の開発」からの援助により行われた。

注

- 1) 性別等の基本属性を用いる「対応分析」と比べ, 自由回答記述などで得られたデータから割り, 回答者の分類及び分析・解釈が行えるという点で優位性を発揮するため本研究では採用した。

参考

- [1] 佐藤達, 城所哲夫, 瀬田史彦「地方への移住関心層と移住可能層との間での地方移住生活イメージに対する選好パターンの違い - 移住先地域での暮らし方・働き方の質に関するイメージに着目して -」, 都市計画論文集, Vol.49, No.8, pp.945-950, 2014.
- [2] 南 博文(編)「環境心理学の新しいかたち」, 誠信書房, pp.3-44, 2006.
- [3] 山本多喜司 & シーモア・ワップナー(編)「人生移行の発達心理学」, 北大路書房, p.17, 1992.
- [4] 須賀伸介 & 大井 敏「自由記述調査法による東京湾のイメージの解析」, 海の研究, 6(4), pp.209-218, 1997.
- [5] 木村昌臣, 古川裕之, 塚本均, 田崎久夫, 空閑正浩, 大倉典子, et al「医薬品使用の安全性に関するアンケートの解析 テキストマイニング手法の適用」, 人間工学, 41(5), pp.297-305, 2005.

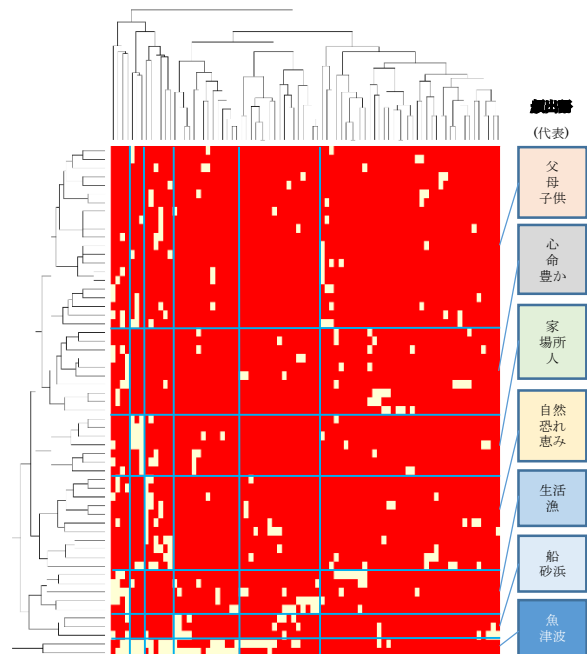


図 1 回答者と頻出語の二元クラスター(回答者番号は省略)

Fig. 1 2D Cluster of Respondents & Frequently Appeared Terms

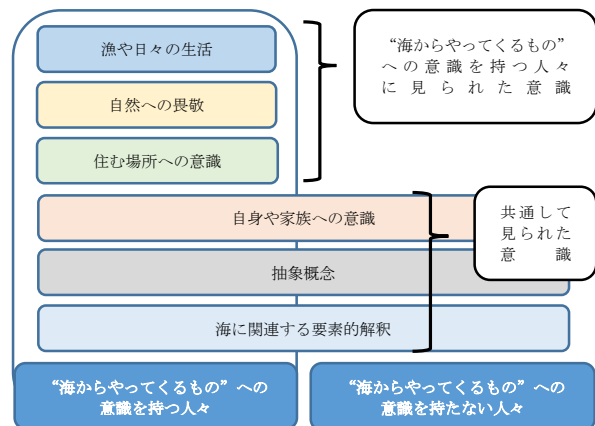


図 2 海に対する意識構造の概念図

Fig. 2 Structure of Consciousness toward the Sea